

内村鑑三著「代表的日本人 - 日蓮上人(仏僧) - 」

岩波文庫(ワイド版)、岩波書店 1997年9月16日刊を読む

日蓮上人 - 仏僧

1. 何が権威ある聖典であるか。ときには矛盾しあう何十もの経典があり、そのなかから、最高の権威ある経典を自分で選ばなければならない。

わが主人公(日蓮上人)にとり、一つの経典のなかに、大乘、小乗を問わず、あらゆるすぐれた経典の年代順が示されていることさえ判明すれば、それで十分だった。

その経典に示された順序では

(1) 仏陀の初説法を含むとみなされた華嚴経(けごんきょう)で始まり

(2) 伝道最初の12年間の教えを収める阿含経(あごんきょう)

(3) 次の16年間の教えである方等経(ほうとうきょう)

(4) 三番目の14年間の盤若経(はんにゃきょう)

(5) 最後の8年間の妙法蓮華経、またの名を法華経である。

この順序から得られる結論は、当然、最後に語られた経典が仏陀の全生涯の教えのエッセンスを含んでいることになる。その中にこそ「万物の原理、永遠の真理、仏陀の本然と悟りの力の秘義」がある。したがって、「妙法蓮華経」という美しい名がある。 P152 ~ 153

2. 「預言者故郷にいれられず」。旧約聖書のマタイ伝 13章 58節でイエスは、「預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばざる事なし」と語っている。

しかし預言者は、きまってその公的生涯を、自分の故郷で開始しているという悲しい事実がある。預言者はこの世に住む家がない身でありながら故郷の家にひかれるのである。どんな目にあうかを承知しつつも、ちょうど雄鹿が谷川の水を慕うようにして故郷に向うのだ。そこでは排斥され、石で打たれ、追い払われる、蓮長(日蓮上人)の一生も同じであった。

3. 私はとるにたらぬ一介の僧侶であります。しかし法華経の弘布者としては釈尊の特使であります。それゆえ、梵天(ぼんてん)はわが右に、帝釈天(たいしゃくてん)はわが左にあって私を守り、日天は私の先導となり、月天は私にしがいます。わが国の神々はすべて頭をたれて私を敬います。

P173

4 .知れ、未法の世に聖典を説く者には、棒で叩かれ流罪にあうは必定である。法華經の勸持品に 2000 年前に書かれてあることが、今、我らにふりかかったのである。それゆえ法華經勝利の時の近いことを喜ぶがよい。

5 .涅槃經に重きを軽きに変える「天重輕受(てんじゆきょうじゆ)」の教えがある。現世で重き目にあえば、来世では軽きことが保証されている。提婆菩薩(だいばぼさつ)は異教徒に殺され、師子尊者(ししそんじゃ)は首をはねられ、竜樹菩薩(りゅうじゆぼさつ)はさまざまな試練にあった。正法の世の仏国においてである。ましてや世の終り末法の始めにおいては、どれほど多難なことか。

「我が奉ずる經のために死ぬことができたなら命は惜しくない」

一書のために死をいとわない人は多くのいわゆる英雄にまさる尊い英雄である。

P174

6 .闘争好きを除いた日蓮、これが私どもの理想とする宗教者である。

#### [ コメント ]

著者の内村鑑三先生は、聖書を重んじる基督信者として知られる。「余は如何にして基督信者となりし乎(How I Become a Christian)」の著書は世界的に有名。

法華經が日蓮上人にとって尊いのは、ルターや内村先生が聖書を尊ばれているのと同じ。皆、聖典崇拝者である。だからこそ、「一書のために死をいとわない人は英雄にもまさる英雄」と解くのだと思う。[内村先生自らが、日本における「キリスト教の日蓮」たらんと志が窺(うかが)われる]との解説が本書 202 ページにある。

最後に一言。マンデラ氏も、ガンジー氏も、そしてホーチミン氏も、そして 5 人の「代表的日本人」も、生き方やその方法は大きく異なるが、「高い志」をもってものごとを成し遂げたものと思う。

- 2009 年 11 月 4 日ヨハネスブルクにて記す 林明夫 -